

南極ロケット観測将来計画シンポジウム

(1971年9月14日 東京大学宇宙航空研究所にて開催)

東京大学宇宙航空研究所・外圏大気共同研究会共催

序

南極昭和基地におけるロケット観測は、第11次観測隊（昭和44年度）から開始され第14次隊でその第1期計画を終了する予定になっている。第16次以降にはさらに新たな構想の下に、とくに国際磁気圏事業（IMS 1975-1977）と密接に関連した第2期観測計画が考えられている。

このような状況において、南極におけるロケット観測の最も基本的な学問的意義・目的について十分な議論をしておく必要があることから、極地研究センター「宙空部会ロケット分科会」からの要請もあり、本シンポジウムが計画された。その際次の2点がとくに考慮された。

1. 1人でも多くの関心ある研究者が集まり易いこと。
2. なるべく南極ロケット直接関係者以外の方から客観的意見を述べてもらうこと。

1のためには関連研究者が定期的集まる外圏大気共同研究会の場を借りることが適当であろうということになり、2のためにはプログラムに見られるような講演者の顔ぶれとなった。

極地でやるべき研究課題はあまりにも多く、ロケット観測もその中の一つに過ぎないことを思えば、その重要性を高めそれへの認識を新たにすることは、ロケット関係者の大切な責務である。幸いにして本シンポジウムには50名近い出席者を得て議論も活発であり極めて盛会であったことは、お世話した者として大変喜びに堪えない。もとよりこの種のシンポジウムは学問の進展ともからみ合せて毎年開催されることが望ましく、今後とも忌たんのない討論を繰返して真に有意義なロケット観測が行なわれるよう期待して止まない。

世話人 小玉 正弘（理化学研究所）